

牧野和春

精神史

桜の精神史

昭和五十三年三月一日 初版
昭和五十三年四月二十日 再版

定価2400円

著者 野和春
兼発行人 牧

発行所 株式会社 牧野出版

〒102 東京都千代田区飯田橋四ノ六ノ一
電話 〇三・二六一・〇七六八
振替東京 二・一〇三〇七九

1091 7802-7947

はじめに

サクラ、さくら、桜。どのように書いてみても美しい。なん回、口ずさんでも心地よい響きを口びるに、ほのかに残す「さくら」。いちばん美しい日本語は、と問われて「花吹雪」——と答えたひとを、私は決して忘れないであらう。

私はひとりで桜花に酔っているのではない。試みに虚子編「新歳時記」(三省堂・昭和九年初版)によって「花」と「桜」と「花見」の項に、目に立つものを拾ってみよう。花の雲、花吹雪、落花、花屑、花埃、花の塵、花の雨、花冷、花の山、花便り、花守。山桜、八重桜、遅桜、朝桜、夕桜、夜桜。桜狩、観桜、花巡り、花の宴、花の茶屋、花の宿、花の幕、花筵、花人、桜人、花衣、花疲。

桜の花びらのどんなに日本人の暮しと心のなかに深く刻み込まれてきたことか。そして一片の桜花のもたらす千変万化に、人々はなんと心くだいてきたことか。「古今集」以来、花といえ、それは直ちに桜を指した。それほどまでに、桜は日本人の心のなかに定着し、精神の基層の部分を構成してきたのである。桜花は国の花であり、民族の心である。

そうであるが故に、単純なる桜花賛美の声を、私はかえってあげまい。また、その裏返しとしての桜花糾弾の興奮にも、私はかえって組することはしまい。花はどこまでも花である。しかし、花なるが故に、精神の問題としてはかえってやっかいで、複雑で、もつれ合うものを含んでいるはずである。花の尊厳をつねに傷つけてきたものは、人間の軽薄さこそであったことをも省みるべきであらう。

私は、肅然として、桜花に対応したい。われらが父祖にとって、桜花とは、そもなんであつたのか。更にまた、われらが現代にとって、桜花とは現になのであるのか。私が、生ける眼球のありつたけをさらけだして、眼前に、花吹雪と化す桜花の片々を、沈黙のうちに見据えておこう、と秘かに決めた理由も、ほんとうはそこにある。

昭和五十三年春、桜花に先がけて

牧野 和春

桜の精神史・目次

口絵写真・花吹雪（山形県寒河江市にて）

撮影 蘭部 澄

函表紙 寢覚物語 絵巻・六道絵（部分）

題 字 著 者

はじめに	一
------	---

一の章 亦 また の名は木花 このはな ノ佐久夜 さくや 毘売 びみ	一一
--	----

二の章 咲く花の薫 かほ ふがごとく	二二
-----------------------------------	----

三の章 たえて桜のなかりせば	三三
----------------	----

四の章 道もせに散る山桜かな	五八
----------------	----

五の章 花やこよひのあるじならまし 六五

六の章 いりあひのかねに花ぞ散りける 七二

七の章 花の下^{した}にて春死なむ 八七

八の章 花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは 九九

九の章 秘すれば花なり 一一一

一〇の章 花は風を厭はず、死は時を期せぬ 一二三

一一の章 よし野にて桜見せふぞ櫓の木笠 一三六

一二の章 春は花山詩鳥はんとしぞす 一五三

一三の章 朝日に匂ふ山桜花 一六一

一四の章 散さん華は 一七三

終章 花吹雪の系譜	一八五
-----------	-----

あとがき	一九三
------	-----

索引	(1)
----	-----

桜の精神史

一の章 亦の名は木花ノ佐久夜毘売

さくら「桜」バラ科の落葉喬木。十数種の総称。中国大陆・ヒマラヤに数種が知られるが、日本にもつとも種類が多い。園芸品種が非常に多く、春、白色または淡紅色の五弁花を開く。八重咲きの品種もある。古来、花王と称せられ、我が国花とし、古くは「花」といえば桜を指した。（以下略）——『広辞苑』より。

桜が日本だけのものでないことは右によっても明らかである。誰かが、桜は済州島のものであるという、と教えてくれた。しかし、それもまた、いかほどの根拠があるのか。ともあれ太古、桜はわが国の山野に自生したことだけは明白である。しかし、八重桜、しだれ桜などは勿論、後世、園芸品種としての産物にすぎない。桜はいくつかの野生種として原始、わが国に自生していた。その種類はヤマザクラ、オオヤマザクラ、オオシマザクラ、カスミザクラ、チョウジザクラ、マメザクラ、ミヤマザクラ、タカネザクラ、チシマザクラ、エドヒガン、カンヒザクラの十一種であつて、このうち代表的野生のサクラとして日本人の心に映じたのは山桜（ヤマザクラ）であつた。私が試みようとするのも、いきおい山桜にはかならぬ。桜に『櫻』の字

を当てるが、

木と首かざりの玉の意と、音を示す嬰（エイ・ヤウ）とから成り、首かざりの玉のような実のなる木、ゆすらうめの意を表わす。日本では、花・葉などがゆすらうめに似ているところから、「さくら」の意に用いる。（角川版『新字源』）

のであって、字源にみるかぎり根拠はないのである。むしろ、ここで関心を寄せるならば「サクラ」の語源であろうが、これについては周知の如く「サ・ク・ラ」説と「サ・クラ」説があり、前者は咲くに接尾語のラがついたとみ、後者はサの神、即ち稲の霊の座（クラ）を意味するという。私にはそのいずれであるか、明らかにする手だてはないが、サ・クラとは稲霊のこもる花であったとみると、そのサ・クラは必ずしもサクラではなく、コブシ、ウノハナ、ユスラウメなど、たぶん春先から春にかけて全株をおおって開花する植物であった、とみる山田宗陸氏の記述（『桜史疑』季刊アニメ・昭和51年5月・平凡社）に新鮮なものをおぼえる。そもそも花という語にしながら、折口信夫氏によれば、前兆れ、先触れというくらの意味なのであって、雪でさえも豊年を知らせる「米の花の前兆なのである。雪を稲の花と見ている。……稲の花の一種の象徴なのである」（『花の話』）。

日本に稲作が渡来したのは紀元前三、四世紀頃とされている。弥生式の時代が始まる。稲作が生活の中心となつてみれば、稲作の豊穰如何が人間の生死をも決める。そういうギリギリの状況に置かれた人間の志向する豊穰への欲求がどんなに強烈、かつ切迫したものであったか。ここに例の「貧窮問答歌」（山上憶良）

のイメージを思い浮べてもよいが、同時に米に容易にはありつけぬ、アワやヒエにて年を過ごして死んで行くほかはなかった多くの民百姓を思い描くことも出来るはずである。ただ、それらが民俗の世界で、右のように定着するのは、時代が下るのではないか（平安時代か？）という疑問の余地はあるにしても。私の意図するところは、形式の確立をまさぐろうとするところにあるのではない。稲の穰りへの強烈なる欲求を断じて捨て切れぬわれらが父祖たちの心のありかというものである。折口説が少なくとも、そういう心の所在に明りを当てて照らし出してくれていることだけは明らかであると思う。それほどに切実であるからこそ、花にさががけての雪が、そして、やがてサクラやコブシなどの花々が、それぞれに稲作への予兆の花としての役割を演じつつづけたのであろう。それらは先に述べた如く、サ・クラであった。そのサ・クラの代表を、やがて日本の山野に自生していたサクラが引受けたのであろう。

三河の奥で初春に行われる「花祭り」のことは民俗の世界ですっかり有名になってしまった。花祭りの中心は「花育て」にあって、竹を割き、先をいくつにも分けて、その先に花をつけた「花杖」について、花祭りを行なう場所を廻る。その場所が、普通、舞屋（まいや）という家の土間、まいとであって、その人々の中心は山伏姿のみようどである。去るとき、その花杖を地面に突き指して帰る。その杖には根のついているものと、ついてないものとがあるが、やがてその杖から根が生じると祭りの唱言は効を奏し、村は豊かになると人々は信じたのである。花杖は稲の花を祝福するものであり、花祭りの花は、やはり稲の花の象徴であると折口氏はみるのである。

ではみようととは一体なにか。折口氏はそれをたぶん「山人」であろうとみる。

桜と稻との結びつきに加えて、ここでは更に大地というものが、豊穰を生む基盤として登場してきたのである。これをどう考えたらよいのであろうか。桜と稻との結びつきだけでも単純ではないのに、これに大地が結びついては事態はいっそうもつれ合うばかりである。おそらくは、更に少なくとも太陽と水とが結びついてくるのであろうが、ここではまず、桜と稻と大地とのもつれ合いを、上手にはぐすことに意を用いなければなるまい。

もう一度折口氏に登場して貰わねばならぬ。「雪は豊年の貢、と言うた雪は、土地の精霊が、豊年を村の貢として見せる、すなわち、あらかじめ豊年を知らせるために降らせるのだと考えた。」（「花の話」という。即ち、大地はすでにある意志を有するものとして動き始めている。それは土地の精霊の存在である。結論をいえば、アニミズムの世界が支配している（しかし、そのアニミズムの世界は今日もなお私たちの精神にあってその深層部分を支配していると私は解釈する）。

天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に国稚く浮きし脂の如くして、くらげなすただよへる時、葦芽の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠したまひき。